Akny

メール4〈∞〉

泡蔵
AWAZO

メール〈夕貴１〉 …… 4
メール〈ゆあ１〉 …… 80
メール〈夕貴２〉 …… 134
メール〈ゆあ２〉 …… 211
メール〈始まり〉 …… 274
メール〈学校〉 …… 328
メール〈夕貴３〉 …… 413
メール〈ゆあ３〉 …… 472
黄昏の教室 …… 521
特別付録
憑きもの …… 628
あとがき …… 840

メール〈夕貴1〉

カラスの鳴き声がどこからともなく聞こえてくる黄昏時……

世界はオレンジ色に染まっていた。

クラブ活動の終了時間もとっくに過ぎ、校舎は昼間の喧噪を忘れひっそりと佇んでいる。

教室ではいつまでも無駄話に花を咲かせていた女生徒達が、見回りの教師に追い出しを受けている真っ最中だった。小言を言われるのに慣れっ子の女生徒達は渋々帰り支度を整えると必要以上に元気よく挨拶をし

て廊下を走っていく。

そんな女生徒達の足音と笑い声を遠くで聞きながら、少年は胸を高鳴らせ息を殺していた。

4階南側の男子トイレ、一番奥の個室――

そんな誰もいなくなったはずのトイレの扉は固く閉じられ、その中から小さな声が聞こえていた。お腹でも壊しているのだろうか、その声は苦しそうになにかを我慢しているようにも聞こえる。

ともすれば聞き流してしまいそうな普通のことにも

関わらず、その声には何処か違和感があった。
男の声とは違うソプラノは、どのように聞き間違えようと女の声にしか聞こえない。
女の声が何故男子トイレの中から聞こえてくるのだろう。しかも何処か艶めかしい女の声が……
「ウッ……アッ……クゥ……」
それはやはり呻き声ではなく、あるモノを連想させる声……快楽を我慢する喘ぎ声のようであった。
しかしいくら小さいと言っても個室から漏れる声は

隠しきれるわけもなく、もしここに他の生徒がいたのであれば一発でなにをしているかばれてしまったであろう。しかもコンクリートでできた室内はいい感じで声を反響させ、艶めかしい声にエコーをかけより一層色っぽくさせている。

そして洋式便座が軋む音……

それはまさに誰もが想像する情事の真っ最中に他ならなかった。

安達夕貴（あだちゆうき）は便器に座る小笠原昌太（おがさわらしょうた）の膝に跨がり、

首に手を回し少しぶら下がるようにして器用に腰を動かしていた。その姿はこの狭い空間での情事が初めてではないことを物語っているかのようにどこか手慣れている。事実野球部の練習に忙しいのにも関わらず週に一度か二度繰り返されていた。

そんな小慣れた腰の動きを見せる夕貴とは対照的に、動きづらいのか小笠原は座ったまま全く動こうとしない。別に動けないわけではないが、可愛らしく喘ぎ声を我慢し、一生懸命腰を動かす夕貴の姿を見てい

るのが好きなようだ。その余裕の笑顔からもわかるように、二人の関係はトイレの中だけではなく数多くこなされていることがわかる。

「ハァ……ゴ、ゴメンね。小笠原君疲れてるのに……」

夕貴は快楽で閉じそうになる瞼を開き小笠原の瞳を見つめると小さな声で謝罪した。しかしその謝罪は心からの謝罪などではないことは、今も止まらぬ腰の動きと頬を染める虚ろな瞳、震える唇からもわかった。

しかもこの放課後の情事は小笠原から求めたのではなく、毎回夕貴から求めているのだから謝罪など無意味である。

付き合いだして既に半年が過ぎようとしていた。モデルの仕事をやっているので意外と忙しい夕貴であったが、予定のない時は必ず野球部の練習をバックネット裏で見学して終わるのを健気に待っていた。一緒に帰ると必ず小笠原が家の前まで送ってくれる。今は試合も近いこともあり、遅くまで練習をしているので一

緒にいる時間は少なくなってしまうが、それでも若い二人には楽しい時間であった。しかし、増大していく夕貴の性欲はあっているだけでは物足らず、今日のように練習が早く終わる時は、どうしても抱かれたくなってしまうのだった。そういう時は小笠原に〈教室で待ってるね〉とメールを入れ、押さえきれなくなる性欲を我慢していた。それでも時間が過ぎ誰もいなくなった校内に一人残されているのがわかると、夕貴は小笠原の教室へ向かい机の角に股間を擦り当てこれか

ら起こるであろうことを想像し小笠原の机でオナニーをして待っているのだった。こうして準備の整っている夕貴は、小笠原が現れると直ぐにトイレに籠もり前戯もせず男根を納めるのがパターンになっていた。

「大丈夫。全然疲れてないし、メール見た時から俺だって夕貴のこと抱きたくてしょうがなかったんだから……どう？　気持ちいい？」

「うん……ハァ……気持ちいいよ……アッ……今日はね。朝から小笠原君に抱かれるって決めてたの……ア

ウッ……本当はちゃんとしたところでいっぱいして欲しかったけど……ハアァァ……試合……ウンッ……近いから……少しで我慢しようと思って……」

もう言っていることが支離滅裂で訳がわからない。とても我慢しているような腰の動きではなかったが、こうして小笠原の手を煩わせずＳＥＸをするのは、夕貴の中では「少し」と認識されているらしい。

可愛らしい容姿とは裏腹に驚いてしまう程淫乱に育っている夕貴であったが、そんな夕貴のことを小笠

原は好きでたまらない様子だ。いや、こんな可愛い子が淫乱であるなら喜ばない男はいないだろう。

「我慢しなくったっていい。俺だって毎日でも夕貴としたいって思ってるんだから……それより夕貴がこんなにエッチだとは思わなかったよ」

「いやぁぁ……そんなこと言わないで……ハウッ……嫌いなの？　エッチな女の子は嫌いなの？」

小笠原にそんなことを言われようと腰の動きは止まらない。そしてその陵辱めいた言葉が興奮を高めてい

るのか秘裂（ひれつ）からはより多くの愛液が流れだし夕貴の快楽を訴えているようだ。

「そんなことないよ。でも俺はエッチな子が好きなんじゃない。エッチな夕貴が好きなんだ。こうやって俺のモノを入れて気持ちよさそうにしている夕貴が好きなんだよ」

「ホント！　うん……気持ちいいよ。ずっと入れていたくなるくらい気持ちいいの……小笠原君に抱かれるようになってからチョットだって我慢できない……夕

貴がこんなにエッチになったのみんな小笠原君がいけないんだよ……ハアァァ……小笠原君が夕貴に気持ちいことといっぱい教えるから……」

瞳を閉じ何度も軽く唇を重ねながらそう訴える。しかし、その言葉には嘘があった。性の開発は正確に言うと小笠原にされた訳ではない。夕貴は忘れてしまっているが、あの不思議なメールが夕貴を快楽の虜にしてしまっていたのだから……

そんなこととは知らない小笠原は、夕貴の言葉を鵜

呑みにし嬉しそうに微笑むと少し意地悪なことを口にした。

「そうなんだ。でも心配だな。俺があまりかまってあげられないから他の男に取られそうで」

「そんなことない！　そんなことないよ。夕貴、小笠原君だから感じるんだよ。小笠原君じゃなくちゃこんなことさせないもん。指一本だって触らせないんだから、だからそんなこと言わないで……それに夕貴だって心配なんだよ。小笠原君人気あるから……今日だっ

て女の子がいっぱい小笠原君の練習見てたじゃない……だから……だから夕貴に夢中になって欲しくてエッチになったんだよ……夕貴の躰は小笠原君のモノなの……ハアァ……小笠原君の望むことならなんでもする。だから夕貴にもっと夢中になって……」

そう言いながら夕貴は腰の動きを速めた。小笠原のことを独り占めしたくて秘裂を締め、より濃厚に、よりいやらしく腰をひねる。

その濃密な腰の動きに小笠原は片眉を寄せ、込み上

げてくる射精感を我慢していた。

「大丈夫。俺の好きなのは夕貴だけだから。絶対に他の奴になんか渡さない」

「ホント……夕貴は小笠原君のモノだよ。だから小笠原君も夕貴のモノになって……」

そう言って唇を重ねると二人は貪るように口づけをかわした。

そんな青臭い若い恋人同士の台詞……

これもまた青春の一ページなのだろう……

夢中になって重ねていた唇が離れる。そして深く小笠原を抱きしめると夕貴はギュッと目を瞑り、耳元で男が喜ぶ台詞を囁いた。

「もうダメ……イクッ、イッちゃう……小笠原君のが気持ちいいから夕貴イッちゃうよ……ハアァァ……イクッ、イクッ……」

そんな男の気持ちをたぎらせる言葉を紡いだ直後、夕貴の小刻みに動いていた腰が止まり全身に軽い痙攣が走った。

「ハアアァァァァ……」

飛ぶような感覚……股間から沸き上がった快楽が脈動するように全身に広がっていく。

至福の一時……

しかし夕貴はこれでは満足していなかった。この快楽は自分でも味わえる快楽。オナニーではいつも第一段階の絶頂までしか味わえない。だが、この絶頂だけでも全身の力は抜けて続けることができなくなる。だからこそ夕貴はその先にある快楽を望んでいた。

そして小笠原も夕貴の絶頂を待っていたかのように行動を開始する。突然夕貴のお尻を両手で掴んだかと思うと動きづらいとわかっていながら腰を振り始めたのだ。

先程よりも大きくなる便座のきしみ……しかし、そんなことを気にする余裕は小笠原にも夕貴にもなくなっている。

「アッアッ……ダメェ……今イッてるの……イッてるから……」

そう言いながら微笑みを浮かべる唇が先にある快楽を期待していた。本当なら小笠原の動きに合わせて腰を振りもっと深い快楽を貪りたいのだが、絶頂が夕貴の行動を阻み躰に力を入れることができない。しかし、そんな心配などいらなかった。夕貴の台詞に興奮を高めた小笠原は更に動きを激しくする。小笠原もまた、この先に更なる絶頂が夕貴を待っていることを知っていた。そこに導きたくて今にも射精しそうになるのを我慢し動きを強くしている。

「だから止めないんだ。もっともっと夕貴を夢中にして、俺から離れられなくするんだから」

お互いに同じようなことを言っているのが面白く、可愛らしい少年達の恋路を見ているようで聞いている方が恥ずかしい。それにいったい何処で仕入れてきた知識なのか、小笠原は肉体で女を支配できると信じているようだった。

そんな傲慢とも言える男の言い分にも、夕貴は嬉しそうに頷くと残る力を振り絞って再び小笠原に抱きつ

いた。

「アッアッ……ハアァァ……も、もう……夢中になってるよ。小笠原君がいないと夕貴おかしくなっちゃうもん……こうして小笠原君にして貰わないと変になっちゃう……」

「わかった。時間がある限り夕貴のことを抱いてあげるから、一人でいる時は……わかってるよね」

「うん……ハァ……わかってる。我慢できない時は小笠原君のこと思ってすればいいんだね」

「うん。それでなにをするの？」
「アンッ……意地悪しないで……わかるでしょ」
「夕貴の口から聞きたいんだ。それになんでも言うこと聞くって言ったじゃないか」
女にいやらしい台詞を言わせるのは古今東西どんな男でもやることだ。そして女は恥ずかしがりながら拒めないのも……
夕貴は小笠原が喜ぶ顔が見たくていやらしい言葉を口にする。予想以上の単語を使って……

「うん……小笠原君を思いながらオナニーする……小笠原君の唇や手やアソコを思い出しながらオナニーするの……アウッ……夕貴の手が小笠原君のだと思ってオナニーしてるの」

ここでも夕貴は嘘をついた。本当は及川美歌（おいかわみう）から貰ったバイブを使いオナニーをしている。なぜだかわからないが、バイブと小笠原の男根（だんこん）の感覚が似ておりオナニーのお伴になっている。こうして毎日のように男根かバイブを秘裂に納めているので、秘裂はまさに

小笠原の男根にフィットして快楽も増しているようだった。

そんなコトになっているとは知らない小笠原は嬉しそうに質問を続ける。

「どのくらいしてるの？」

「そ、そんな……アンッ……言えないよそんなこと……エッチな子だと思われちゃう」

自分からＳＥＸを求めておいて今更という気もしないでもないが、夕貴は喘ぎながら恥ずかしそうに俯い

てしまった。その仕草が男を喜ばせているとは全く気が付いていない。小笠原は動きを止めぬまま、夕貴が喜ぶ殺し文句を呟いた。

「エッチな夕貴が大好きだよ。それにどれだけ俺のことを思っていてくれるか知りたいんだ。だから教えて」

そんなことを言われたらキュンキュンきてしまう。誰よりも小笠原のことを思っている。だからこそこうやって場所もわきまえず求めてしまうのだから……

恥ずかしい。恥ずかしかったが教えてあげたい。夕

貴がどれだけ小笠原のことを思ってオナニーをしているのかを教えたくて夕貴は深く唇を合わせた後、喘ぎ混じりの掠れるような声で呟いた。

「毎日してるよ……ハァァ……小笠原君に抱いて貰うのを想いながら毎日してるの……」

毎日オナニーをする女の子がどう思われるかなんてもうどうでも良かった。オナニーの回数こそが小笠原への想いの深さだと言うように……

「毎日……凄いね。俺でも毎日はできないよ」

「そうなの……アッ……なんだか寂しいよ」
「そうじゃないって、こうして会える時にいっぱいしたいから我慢してるんだ。それで一日何回位してるの」
「アンッ……さ、三回……多い時は五回くらいしちゃう……」
毎日やっていることもそうだが、その回数にも驚いた。それでも小笠原は夕貴のことを嫌いになるどころか益々好きになっていく。これだけ夕貴が求めてくるのだ。別に小笠原のＳＥＸが上手いというわけではな

かったが、こんなにも夢中になってくれるのだから男は自信がつくに決まっている。その自信があれば、きっと次の試合でもいい成績を残せることだろう。

「嬉しいよ。そんなにしてくれて……」

「うん……ハアアァァァァ……激しい。激しすぎるよ……きちゃう。さっきより大きいのがきちゃうよぉ……」

先程の絶頂が抜けないうちに次の大きな波が夕貴の躰を覆い尽くそうとしている。下腹部に溜まっていく

快楽の風船がドンドン膨らみ今にも弾け飛びそうだ。

その台詞を聞いた途端便座の軋む音が更に大きくなっていく。この音といい喘ぎ声といい、もう遠慮している大きさではなくなっていた。もし廊下を歩く人がいたなら気が付かれてしまうのではないかと思えるくらい大きくなっている。

「ハァハァハァ……ダメッ……凄いのがくる……夕貴、小笠原君にイかされちゃう……」

「ハァハァハァ……俺もイキそうだ」

「嬉しい……一緒に……一緒にイキたい」
「ああ……もう少しだから……」
「ハウッ……アッアッ……うん……もう少し我慢する……アッアッ、ダメェ……我慢なんてできない……イクッ……イクイクイクイクイクゥゥゥ」
我慢できず夕貴の躰に絶頂が襲いかかった。その大きさは先程の絶頂など比べものにならず躰を激しい痙攣が襲っている。その痙攣の大きさに、小笠原は必死になって夕貴の躰を抱きしめ崩れ落ちないように支え

た。もう腰を動かすことすらできない。

そして７秒間の激しい痙攣の後、徐々に落ち着きを取り戻してくるが、それでも躰の震えが止まることはない。

この激しい絶頂は、小笠原とＳＥＸをするようになって知った快楽……

激しい波が今も夕貴の躰を包み込んでいた。

そして快楽の残像は夕貴の躰にも震えとして現れ、秘裂はまるで精液を搾り取るかのようにうねってい

る。

その締め付けに小笠原は遅れること10秒後、男根を秘裂に差し入れたまま精液を放っていた。

「ウッ……」

「ハアアァァァ……で、出てる……小笠原君のが出てる……気持ちいい……」

敏感になった感覚は精液が放たれるのすら拾い上げ快楽に変換していく。

全身が痺れているような感覚、小笠原に強く抱きし

められ幸せを感じる。

そんな穏やかで幸せの時間が過ぎていく……

そして、なにも考えられぬまま5分が過ぎ、快楽が雪解けのように躰から抜けはじめると、今も差し入れられている男根が再び存在感を強くしてきた。射精をした後、5分もの間萎えることなくいきり勃っていようとは……いやそれもそのはず、夕貴の秘裂は快楽が抜ける今の今までうねり、吸い付くように男根を刺激し続けていたのだから……

そのたくましい男根を感じた時、夕貴の腰は再び動き始めた。

「お、おい……」

その留まることのない性欲に、さすがの小笠原もビックリしてしまった。別に小笠原も満足したわけではないが、まさかこんなにグッタリしているにも関わらず更に求めてくるとは思わなかったのだ。

「ダメェ……ダメなの……こんな大きいのが入ってたら止められないよ。お願い……もっとして。　メチャ

クチャになるくらい小笠原君を感じたい……もっと深く小笠原君の気持ちいいを刻み込んで……もっと夕貴のココに小笠原君のを注ぎ込んで……」

虚ろな瞳に涙を浮かべ可愛らしくおねだりをする。こんな顔を見せられて引き下がれる男が何処にいよう。小笠原は唇を吸うと腰に手を回し再び動き出した。

「わかってる。俺だってこれくらいじゃたりない。もっともっと夕貴のことを抱いていたい。だからもっと抱いてやるからな」

夕貴の旺盛な性欲に着いていくとは、小笠原もまた強い精力の持ち主だったようだ。これも野球部で鍛えた肉体のおかげなのか全く疲れなど見当たらない。

そんなたくましい小笠原の行動に、夕貴の唇には笑みが浮かんでいた。これでまた気持ち良くなれるというようないやらしい笑みが……

そして二人は、ここが学校のトイレだと言うことも忘れ、陽が沈むまでお互いの躰を貪り続けるのだった。

＊　＊　＊

「ハアァ……アッアッ……」

午前０時を過ぎているというのに、夕貴の部屋には艶めかしい小さな喘ぎ声が響いていた。今日の放課後あれだけ小笠原に抱いて貰ったというのに躰の疼きが収まらず、ベッドに入ると手は自然と股間へと伸びてしまった。

トイレの中の情事は一時間程続き、何回も絶頂を迎え身も心も満足して帰宅したはずなのに、欲望の器は僅か数時間の内にいっぱいとなり、夕貴をオナニーの泉へと引きずり込んでいった。だが、ここまでならいつものこと、小笠原に抱かれた夜、あの幸せの時間を思い出しながら柔らかな快楽に落ちていくのは決められたルーティンワークのように毎回行っていることだ。

しかし、今回はいつもとなにかが違っていた。

いつもであれば軽く秘裂に指を這わせ、軽い絶頂を迎えただけで満足して眠りについていたはずなのに、夕貴の中指と薬指は深々と秘裂に差し入れられ、粘液質の液体を混ぜるいやらしい音を奏でている。

「アッアッ……ま、また……またイッちゃいそう……」

いつもよりも激しいオナニーは、当然ベッドの上で静かに行っているのではなく、邪魔になったパジャマを脱ぎ捨て、裸になり脚を大きく開いて秘裂を嬲(なぶ)って

いる。

これは夕貴が本気でオナニーを楽しむ時の体制にほかならなかった。裸でオナニーをするのは小笠原に抱いて貰っていることを想像しやすくするため、それに最近はベッドの上でＳＥＸをするのがご無沙汰なので、その欲求を晴らすためにもこの体制をとっている。

「アアアァァァ……イクッ、イクッ……」

更に腕が激しく動かされると高まってきた感情と比例するように愛液が分泌され、飛び散った愛液がシー

ツの上に点々と染みを残していく。そして激しく動かされていた指が股間を持ち上げるように深く秘裂に突き刺されると躰が大きく反らされ全身に激しい痙攣が走った。

「イクゥゥ……」

つま先、お尻、頭の三点で支えられ、何度も痙攣を繰り返す夕貴……そして絶頂の痙攣が治まると同時に、崩れ落ちるようにしてベッドに身を沈めた。

「ハァハァハァハァハァハァ……」

荒い震えるような呼吸音が聞こえる中、夕貴の指は未だ秘裂に収まったままになっている。そして更に数分が過ぎた頃、指は小さく動き始め再び刺激をあたえはじめるのだった。

「アッアッ……ダメェェ……もう5回もしてるのに……まだ全然収まらない……私どうしちゃったの……躰の疼きが止まらない。気持ち良くなってないとおかしくなっちゃうよ……」

今までこんなになったことなど一度もなかった。

いったい夕貴の躰はどうしてしまったのだろう。まるで迫り来る恐怖を忘れようとしているかのように躰を貪ってしまう。それと同時に、日増しに強くなっていく性欲に戸惑っていた。いったいいつからこんなにエッチな女の子になってしまったのだろう。夕貴は快楽に沈みそうになる思考を奮い起こしそんなことを考えていた。

しかし、どんなに記憶を掘り返そうとも霧に覆われた森の中を歩くように、全く先が見えてこない。この

快楽に貪欲な躰が出来上がったのは小笠原に抱かれるようになってからだと夕貴は信じ込んでいた。そう信じたいのだが、夕貴の心には割り切れない違和感がある。その違和感とは、心では全てを小笠原に教えられたと思っているのに、躰に違うと言われているような感覚だった。

何故夕貴はこんなことを思っているのだろう。それは小笠原に初めて抱かれた時のこと、色んな人に聞いていた痛みが全く襲ってこなかった。初めは多かれ少

なかれ必ず痛みを感じると聞いていたのに痛みがないどころか出血もしなかった。そして余り間を置かず、躰は快楽だけを拾い上げるまでになっていた。そんな初体験をしたのだ。ＳＥＸに対し拒絶感はなく、むしろ好感しか持たなかったのだからＳＥＸに、快楽に溺れるのも仕方のないこと……しかし、いくら痛みを知らず性に対して好感触しか持っていなかったと言っても、今の性欲は異常ではないかと思えてならない。

この曖昧な記憶……夕貴はついこの間まで記憶して

いたはずの不思議なメールのことをすっかり忘れてしまっていた。

そんな忘れ去られた記憶など知らず、夕貴の指先は確実に快楽のツボを捉え、ドンドン動きを速くさせていく。そして流れ出る愛液と共に違和感も薄らいでいくのだった。

「ハアァァァ……くる！　くるよぉ。気持ちいいのが……ダメッ、我慢できない……イクッ、イクゥゥ……」

再び電気が流れたように躰が小刻みに痙攣を起こす。

６回目の絶頂……

いつもよりも速いペースでこなされる回数……

それなのに夕貴の欲求は満たされることはなかった。

「ハァハァハァ……ダメだ……こんなんじゃ満足できない……指なんかじゃ全然満足できないよ……今日は使わないようにしようと思ったのに……」

夕貴は快楽が残る躰を奮い立たせ、ベッドから下りるとタンスへと向かった。

そこにはある物が隠されている。美歌に貰った大切な物、小笠原とは違う大切なオナニーのパートナーが……

夕貴の目指すタンスの一番下の引き出しには、カラフルな下着に隠されるようにして美歌からプレゼントされたこけしタイプのバイブが仕舞われていた。

少し戸惑いながらバイブを取り出し両手で握ると、

夕貴はもう一度使おうかどうか考えてみる。今まで小笠原に抱かれた後はバイブを使ってこなかった。抱かれることで性欲が満たされていたのもあるが、その日くらい小笠原が残してくれた感触を大事にしたいという気持ちがあったからだ。しかし今日はそんなことなどかまっていられない程ムラムラしている。むしろ小笠原の残してくれた感触をトレースできるバイブを使う方がいいのではないかと思える程だ。それに夕貴は覚えていないが、このバイブは小笠原の男根と同じ大

きさをしており、本能的にそれを察しているのか、こうして握っているだけで我慢の限界は簡単に超えてしまうのだった。

バイブを持ちベッドに戻ってきた夕貴はベッドの縁に腰掛け脚を開くと、先程まで躊躇していたのが嘘のようになんの戸惑いもなくバイブの先端を秘裂に宛がった。

「ハァハァ……こうして見てると小笠原君にして貰ってる見たい。今度はいつして貰えるんだろ、夕貴は明

日にだってして欲しいのにな。小笠原君だって毎日したいって言ってくれたし……でも試合も近いしそんな無理言っちゃったら嫌われちゃう。それまではこれで我慢しなくっちゃ」

そんなことを呟きながら夕貴はバイブを両手で掴むと徐々に力を入れていく。秘裂は先程から乾くことなく濡れているので抵抗する物はなにもない。

太い大きなバイブが小さな秘裂を押し広げゆっくりと掘り進んでいく。

そして全てを飲み込んだ時、夕貴の口から溜息をつくような甘い喘ぎ声が漏れるのだった。

「ハアアァァァ……凄い気持ちいい……なんかいつもより感じちゃう……」

もう入れているだけで気持ちがいい。それにこうしてお腹に力を入れ秘裂を締めると小笠原も喜んでくれるのでバイブを使った時はいつも練習している。夕貴は動かぬまま秘裂が押し広げられる圧迫感を数分間楽しむと、その快楽に飽きたのかバイブをゆっくりと引

き出し、そして一気に深々と突き刺した。
「アアアァァァ……これ、やっぱりこれが気持ちいいの……」
小笠原が主導権を握っている時に良くしてくれること……トイレの中だとこんなことはできないが、ベッドでする時は夕貴が喜ぶので体位を変えながらこのストロークを繰り返してくれる。それをまねてバイブを使う時は必ずこのリズムを繰り返していた。
「ウンッ……ハアァ……奥に当たる……凄く気持ちい

い……またイッちゃう」

SEXをするよりも短いスパンで絶頂が近づいてくる。小笠原に攻められ思いも寄らぬ快楽を味わうのもいいが、オナニーは絶頂が目的でいつも最短距離で走り抜けていく。こうして何度も繰り返される絶頂が、夕貴をオナニーの虜にしているのだ。今だって6回の回数をこなすのに30分程しか掛かっていない。

「アッアッ！　気持ちいいの、こうして強く突くと頭が真っ白になっちゃう……イッちゃうよ……ハアァァ

……もう少し、もうすぐ来ちゃう」

絶頂のボルテージを説明するかのように言葉に出す。自分でもいやらしいことをしているとわかっているのに、この陵辱感が快楽を強くしてくれる。

貪るように手の動きを速めると急な階段を駆け上るように、快楽のグラフが急上昇を開始する。

「ハアァァ……イクッ、イクッ……」

もう限界寸前！　しかし、もう少し我慢してみる。限界ギリギリまで快楽の風船を膨らませてから爆発さ

せれば、小笠原にして貰った時のように強い絶頂に近づける。そう信じて我慢をすること十数秒。快楽の風船は爆発した。

「イクゥゥ！」

バイブが深々と差し込まれたと同時に夕貴の躰が跳ね上がり、大きな波が全身を襲う。

自分ができる最高の快楽。

襲いかかる快楽に躰の自由を奪われながらも、夕貴はやはり小笠原に抱かれたいと思っていた。こんな無

機質な男根を模したオモチャではなく、血の通ったたくましい男根に犯されたいと……

「ハァハァハァ……ダメだ……まだ足らない。小笠原君のこと考えると全然疼きが止まらないよ……」

夕貴は深々と突き刺さるバイブを抜くとベッドを抜け出しフローリングの床に座る。そしてバイブを押しつけると吸盤で床に張り付けた。

床からそそり立つバイブがいやらしい。そして夕貴はバイブに跨がると手を添えることなく挿入していっ

た。

「ハアァァァ……今度は夕貴が動くね。だから小笠原君は動かないで……」

妄想を強化し小笠原に抱かれることを思い描く。こうして騎乗位になれば自分でバイブを動かすよりも寄りＳＥＸに近づけるような気がする。

床にぺったりと座り込んだ夕貴は、瞳を閉じるとたくましい小笠原の裸を想像し、腰を上下ではなく床をするように前後に動かしはじめた。こうすると膣の中

がかき回され奥の方が広げられているようで気持ちがいい。

「アッアッ……気持ちいいでしょ。夕貴も小笠原君の入れてると気持ちいいの……ホラ、こうして動くと小笠原君のがお腹から飛び出してきちゃいそうなの……でも、これが気持ちいいの……小笠原君も気持ちいいでしょ。だからいっぱい出して……小笠原君だけが夕貴の中に出していいの……ううん。夕貴が搾り取ってあげる。小笠原君の精液ぜ～んぶ夕貴が呑んであげる

から……上の口でも下の口でも好きなところに出して……」

本当ならこんな台詞など言えるわけがない。抱かれることを妄想し一人だから言える言葉、そのいやらしい言葉が更に興奮を高め快楽を強くしてくれる。そして夕貴は自らの胸を揉み、更に快楽の輪を広げていった。

「ハアアァァ……胸も気持ちいいの……全身が気持ち良くておかしくなっちゃいそう……アッアッ……ウウ

ン……ダメッ！　我慢できない。またイッちゃう……小笠原君がイッてないのに、夕貴の方が先にイッちゃうよぉ……」

快楽を強くした途端、夕貴は絶頂の山を登り始めていた。

近づいてくる絶頂の波……

早くなる腰の動き……

夕貴は苦しそうに後ろ手に両手を着くと激しく腰を上下に動かした。

絶頂に近づく度に溢れ出る愛液がフローリングの床に飛び散っていく。

そして勢い余ってバイブが秘裂から飛び出た瞬間、夕貴は絶頂を迎え秘裂からは美しい雫が噴き出したのだった。

「イクゥゥゥゥ……」

快楽の振動が全身に行き渡り大きな痙攣を繰り返す。その痙攣と共に吹き出される潮……その雫は数メートル先にまで飛び散っていた。

「アアアアァァァァ……」

気持ちよさそうな喘ぎと共に躰が崩れ落ちていく。

フローリングの冷たさが火照った躰に気持ちがいい。

夕貴はそんな幸せな時間を過ごしていた。

「ハァハァハァ……出ちゃった……これが潮吹きって言うんだよね……」

小笠原には何度か吹かされたことはあったが、自分でしている時は初めての経験だ。それでも夕貴は自分

だけでこれだけの快楽を味わえたことに喜びを感じているのか、口元には小さな笑みが浮かんでいる、どうやらやっと満足できた様子だ。

そんないつも以上の快楽の余韻に浸っていると、突然ベッドの上に置いてあった携帯電話が鳴り夕貴を驚かせた。

ビクッ！

まったりとしていたので躰を硬直させる程驚いてしまった。それでも快楽の余韻は未だ抜けきらず直ぐに

動くことができないのか、なんとか首だけ動かすとベッドを見上げた。

「ハァハァハァ……せっかく気持ち良くなっているところなのに……こんな時間に誰からだろ？」

聞き慣れた着信メロディーで現実に戻されたことに少し腹を立てながらも、重くなった躰を持ち上げる。しかし、力の入らない躰ではやたらベッドが遠く感じる。それでもシーツを握り這い上がるようにしてよじ登ってきた夕貴はなんとか携帯電話を取ることができ

た。

着信メロディーからメールだとわかっていたのでそんなに慌てることもなかったのだが、そこは現代社会を生き抜く女子高生。どんな時間に届いたメールだろうと直ぐに開かなくては気になっておちおち眠ることもできない。

夕貴は転がるようにベッドに身を投げ、荒くなった息を整えることもせず、少し震える手でメールを開いた。

「あっ、悠那からだ。どうしたんだろうこんな時間に……って悠那って誰だっけ？」

メールを開き名前を見た時には、その人物の顔まで思い出せたというのに、今は名前を見ても誰だかわからない。夕貴は不思議に思いながら「佐々木悠那」という人物を必死になって思い出そうとしていた。

「佐々木悠那……知らない人？　でも登録してあるんだから会ったことのある人だよね」

着信したメールにはちゃんと「佐々木悠那」と言う

名前で表示されている。アドレス帳に登録されているのだからどこかで会ったことのある人物に違いない。女の子の名前からして撮影で会った子かもと思うのだが、夕貴には全くその名前に見覚えがなかった。

「ダメだ。全然思い出せない。なんか聞いたことのある名前のような気もするんだけどなぁ」

どうしても思い出せない名前に少しイライラしながらメールを開いてみる。すると本文には悪戯としか思えない内容が書かれているのだった。

〈久しぶり。いっぱいオナニーしてるんだね。私も沢山してるんだよ。でも私はオナニーじゃなくてＳＥＸだけどね。

あのね。私クラスメイトにずっと犯されてるの。もう気持ちよすぎちゃっておかしくなっちゃいそう。ねぇ、これじゃ私壊れちゃうよ。助けに来て・・・・〉

そんなバカげた内容が書かれていた。メールを読み

終えた夕貴は、その稚拙でバカバカしいメール内容に呆れてしまう。と同時に少し驚いてしまった。まさか本当にオナニーをしているところを言い当てたのではないだろうが、現実にしていただけにビックリしてしまう。まぁ偶然の一致だろうが悪戯にしてもチョット程度が低いような気がした。

「もうぉ、驚かさないでよ。一瞬本当に言い当てられたのかと思っちゃったじゃない。でもなんでこんな悪戯メール送ってくるんだろ？　この悠那って子に私な

んか悪いことでもしちゃったのかな？　もしかして覚えてなくちゃいけない子だったのかも……なんか気になるんですけど」

夕貴はもう一度心の中で「佐々木悠那」の名前を連呼し、なんとか思い出そうとするのだが一向に思い出すことができなかった。

数分考えて見たが、手がかりも見つからないのでメールを閉じると携帯電話を枕の脇に置いた。本当ならこの時間も快楽の余韻に浸っているはずだったのに

……そんな不満を漏らしながら夕貴は上体を起こすとベッドの棚に置いてあるティッシュボックスに手を伸ばし数枚引き出して濡れた股間を拭いた。そしてベッド下に目を向けると飛び散った愛液と潮がルームライトの光を反射させ輝いている。

そんな床にできた星を眺め、ひとつ溜息をついた夕貴は、力の戻ってきた躰を起こしベッドを抜け出すと引き出しからタオルを取りだし床を拭いていく。こうしてオナニーの後処理をしていると少しむなしくなっ

てくるが、先程の快楽を考えればこれくらいの手間など手間ではない。

いつも以上に激しいオナニーをしてしまったので汗で気持ち悪かったが、まさか今からシャワーを浴びるわけにもいかない。こんな時間にシャワーなど浴びたら両親になにをやっていたのかといらぬ詮索をされかねないので、明日少し早く起きてシャワーを浴びることにした。

とりあえずもう一枚タオルを出して全身を拭き、パ

ジャマを着るとそのままベッドに潜り込む。

「はあぁぁ～、気持ち良かったけどやっぱり小笠原君にして貰う方が好きだな。ホントなら明日もして欲しいけど試合が近いから余り無理させられないよね。これで成績が悪かったら私が負担になってるってことだもん。だから当分は一人で我慢しなくっちゃ……」

そんなことを考えていると心地よい疲れが睡魔を引き寄せてきて、数分後には静かな寝息を立て始める。

しかしこの時夕貴は、小笠原のことを考えるのでは

なく、もっと深くメールのことを気にしておかなくてはいけなかったことに気付くことができなかった。